みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Foreword

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008663

はじめに

本論文集は，平成 14 年度から 16 年度にかけて実施した，国立民族学博物館の共同研究プロジェクト「ジェサップ北太平洋調査を追試する（1902–2002）：極東シベリア―北米大陸諸民族の文化変容」の研究成果を報告するものである。

この共同研究プロジェクトには前史がある。2002 年 10 月，国際シンポジウムが札幌市で開催された。「渡鴉（ワタリガラス）のアーチ：ジェサップ北太平洋調査を追試・検証する（1902–2002）」と題したシンポジウムは，「アメリカ人類学の父」フランツ・ボアズが，ニューヨークのアメリカ自然史博物館（The American Museum of Natural History）の事業として遂行した，「ジェサップ北太平洋調査」（Jesup North Pacific Expedition —— 1897–1902）の「終了百周年」を期して企画・実行された。

「ジェサップ調査」が対象とした地域は，ベーリング海を挟む新旧両大陸の沿岸部，アムール川以北の極東シベリアから，アラスカを経て，コロンビア川以北の北米北西海岸に至る広大な空間（これを「ジェサップ領域」という）である。「ジェサップ領域」において 5 年がかりで展開された人類学的フィールド調査は，全 11 巻（31 分冊）からなる浩瀚な報告書シリーズを産出した。20 世紀の人類学研究がこれら報告書に裨益するところは，甚大である。とりわけロシアの人類学者 W. ヨヘルソンや W. ボゴラスが執筆した，チュクチ，コリヤーク，ヤクート，ユカギールに関する報告書は，シベリア研究の「バイブル」と化している。

1997 年 11 月，アメリカ自然史博物館では「ジェサップ調査」の「開始百周年」を記念する国際シンポジウムが，「文化の構築，当時と現在 —— フランツ・ボアズとジェサップ調査の百年」と銘打って開催された。我々もそのシンポジウムに参加したが，そこには多くのロシア人研究者や先住民の人たちも招かれていて，「ジェサップ調査」以後の百年間に「ジェサップ領域」で「何が起こり」，その「原因は何であったか」といったことが率直に話し合われた。

札幌シンポジウムの目的は，ニューヨークでの討議をさらに深めるべく，「ジェサップ領域」でフィールドワークを実践中の世界の研究者を札幌に招集して，各自の経験や知見を披瀝しあうことで，「ジェサップ調査」の成果を 1 世紀後に改めて「追試・検証」することにあった。シンポジウムには 15 名の外国人研究者を含めて約 40 名の研究者が参加したが，本論文集は同シンポジウムの報告書にほかならない。

民博での共同研究プロジェクトは，札幌シンポジウムの企画段階で組織されたもので，共同研究員の 15 名はシンポジウムを推進する実質的役割を担った。共同研究会はシンポジウム後も継続され，主として「ジェサップ領域」における文化変容をめぐって討論を重ねた。

ボアズは，「ジェサップ領域」に包摂される北海道やサハリンにおいて，アイヌ民族を対象とするフィールド調査を実施することに強い意欲を示したものの，「ジェサップ調査」では諸般の事情により，その思いは成就しなかった（少なくとも同調査の報告書シリーズには，アイヌ文化が反映されていない）。そこで札幌シンポジウムでは，ボアズの見果てぬ夢を実現すべく，アイヌ問題を議題に加えるだけでなく，討論の場も北海道の札幌に選定したわけである。

日本における北方研究は，シベリアが長らく外国の研究者にとっては鎖国状態にあったこともあり，低迷してきた。かかる事態が次第に解消されていった 1990 年代からは，我が国のみならず諸外国でも，「ジェサップ調査」以降で初めて，北方研究が再び活性化している。本論文集は，このような情況の現場報告として読むことも可能であろう。本書の上梓が，より多くの研究者に北方の民族・文化への関心を喚起することを，また北方研究のさらなる活性化にも貢献することを，切望してやまない。

本書の刊行に当たり，共同研究会の運営や出版計画で多大な御協力を賜った民博の共同研究プロジェクト・メンバー，佐々木史郎教授，岸上伸啓教授，池谷和信教授へ，衷心より感謝を申し上げたい。

2009 年 2 月 12 日

編者
谷本　一之
井上　紘一